⑤重症心身障害者の通所施設「朋」の運営とまち～地域資源としての障害者施設

■編集部

1―「朋」建設までの道のり
2―地域を紡ぐ～地域の中の磁石として
3―都心の障害者施設～地域資源として

1―「朋」建設までの道のり

❶―建設反対派？

知的障害者通所更生施設「朋」に、開設当初からボランティアとしてかかわって十四年になる湯沢さんは、建設当時、反対運動のあることを新聞記事で初めて知った。地域住民としては、反対した覚えはない、というのが正直な感想だった。

「ここは横浜市の高台にある、いわゆる高級住宅街。そういう住宅街に文化施設ならいざ知らず障害者施設は似合わない」というくだりのある地元自治会長名の反対の申し入れ書が横浜市に届けられたのは、朋の建設計画が地元に伝えられた直後、一九八三年のことであった。朋の施設長の日浦さんは、「思いをもった当事者」として市役所とともに地元説明会へも参加し、話し合いを続けた。湯沢さんは、当時息子が通っていた小学校で、日浦さんの話を聞いたのを覚えている。

開所して十四年、今では朋はすっかり地域に根付き、自治会長は「朋があるのは心強いですよ。これからの高齢社会、力を借りなければならない」と言うようになった。

❷―朋とは

朋は栄区桂台中四丁目に在る。根岸線港南台駅からバスで約十五分、昭和四十年代後半に開発された大手分譲地の一角に位置している。西側の敷地には桂台地域ケアプラザと桂台地域活動ホームが、東の敷地には市立桂台保育園が隣接している。また、北側には、市立桂台中学校が、バス通りを隔てた南側には市立桂台小学校があり、桂台公園等公共施設の集積地であると同時に、バス通りにはイトーヨーカドー桂台店などの大規模商業施設と小売り商店が並んでいる。びっしりと敷き詰められた住宅地の中心部にある。（地図参照）。

朋は、十五歳以上の重度・重複障害者のデイサービス事業を行っている。日本ではじめての重度・重複障害者の通所施設である。ほとんどの通所者は立位は困難で、車椅子により移動し、現在四十九人の利用者のうち十六人がチューブ栄養である。

❸―朋の誕生まで

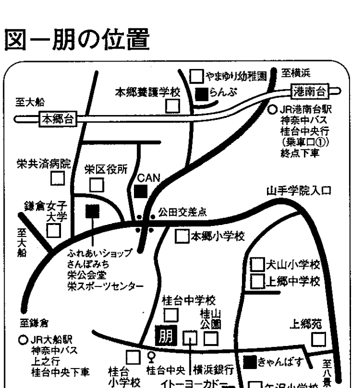
朋の始まりは、一九七二年、南区中村小学校の一角に設置された重度・重複障害児のための「訪問学級」の誕生に遡る。当時、学齢期の「重度・重複障害児」いわゆる「重症心身障害児」が通える学校や施設はなく就学は猶予または免除されていた。そういう人を対象に、一般小学校の中にプレハブ教室を建て三十人の子供達と六人の教師、五人の非常勤講師の体制で「訪問学級」は始まった。養護学校義務制の実施に先がけること七年前である。施設長の日浦さんは、この時の訪問学級の指導講師であり、長い道のりを朋と歩んできた人である。

義務教育を終了した後、親子だけで家庭で孤立化することを恐れた親と教師たちは、自分たちで地域作業所の建設をする。しかし、独力での運営が行き詰まった時、市の障害福祉部は「精神薄弱者更生施設」として位置付けた施設の整備を検討し、国と県からの認可を受けた。市は単独の運営費補助制度を設け、土地の無償貸与という援助を行った。建設費は、法人認可を受けた「朋」の積立金、社会福祉・医療事業団からの借り入れ、国と県と市の補助金で賄われた。

「重度・重複障害児」が、年齢を重ね、成長するプロセスをその親と教師たちが支え合い、行政がそれを支援した、その結実が「朋」である。

2―地域を紡ぐ～地域の中の磁石として

図―朋の位置



❶—相手を動かす存在としての障害者

朋の人たちは、近所のスーパーでの買い物、レストランでの食事、区民プールでの水遊び、ボーリング場や遠くは東京の六本木まで散歩にでかけ、コンサートや演劇の観賞までこなす。施設長の日浦さんは、「朋の一人一人が個人として存在し明確になること、皆に見えること」を運営の基本に置いている。「一人一人の社会参加プログラムを考えてやってきたら、一見重い障害の人が、相手を動かす存在だとみえてきたからだ」と語る。

最近、新聞に紹介された鉄平君もその一人である。近隣の中学の生徒だった鉄平君は、中学二年の夏休み、他の中学生に誘われ老人ホームと間違えて朋にボランティアにきた。茶髪にピアスという今風少年の鉄平君が、朋を気に入ったのは、「僕が僕でいられる場」だから。ゆうこさんは最重度の障害者だが、鉄平君がきたら「わっ」と声を出し、にこにこ笑うようになった。鉄平君は「身体や言葉が不自由でも、新入りの自分を気遣ってくれる人たちだった。ぼくは人を外見だけでみていた」と、語っている。今は高校生の鉄平君が「やばいすよー、単位とれそうにない」というと、ゆうこさんは声を出して心配するようになった。あらゆる人に個性があり、いろいろな出会いをつくることができる。

世界的なピアニストの宮川さんも、吸い込まれるように聴いてくれた朋の人たちに、鳥肌のたつような感動を味わった、という。多くの訪問者を迎えている土曜プログラムは、皆を喜ばせるための企画をしようという様々な人たちの提案で運営されている。

❷—まちとの交流

近所の小・中学校との年一回の交流会は、欠かせない行事である。小学生にとっては六回体験することになるが、三年目ぐらいから、親しみを感じ始め、職員やメンバーを個人名で覚えてくれるようになる。そうした中で、隣の中学の卒業生で職員になった人もいる。

車椅子で移動し、しかもチューブ栄養で、一時間に何度も痰の吸引が必要な人も多い朋の人たちを外に連れ出す「個別外出プログラム」には、当然多くの介助者が必要となる。年間延べ約三千人のボランティアが関わっている。朋のボランティアのほとんどは、徒歩圏に住んでおり、買い物や銀行に行くついでに、週一回から三回ほど気楽に立ち寄り様々な手伝いをしていく。朋とボランティアとの関係も自然にできてきた。

まちの行事、連合町内会の運動会や祭には一町内会員として必ず参加する。車椅子の輪で参加するので、引っ越してきた人はビックリするが、散歩にでれば、「今日は暑いね、どこに行くの」と日常的に声をかけてくれるようになっている。先日、買い物に出た朋の人がイトーヨーカドーで発作を起こして倒れたが、その時は、近所の人が心配して駆けつけてくれた、という。

平成十年度事業実績報告書によれば、実習・研修の受け入れは年間四百四十人である。地元企業のファンケルとの関わりも濃厚だ。社員研修にも利用され、新人研修では、ボランティアを募集し、朋とは毎年の交流会が開かれている。ファンケルの池森社長は「人を大事にするのは企業も同じ」という考えで、朋とは親密な友だち関係である、という。

朋が「人と人との磁石となっている」「朋がまちをつつんでいる」と、あるボランティアが言っている。

3—都心の障害者施設～地域資源として

すでに述べたように、朋は、小・中学校、ショッピング街、保育園、地域ケアプラザ、地域活動ホームと並び、この住宅地の中心部に存在している。「まちの中で見える存在としての障害者」であること、「まちの人と心のやりとりをする」ためには、このロケーションが極めて大きかったと言えよう。まちを歩いていると、車椅子の障害者が「こんにちは」と声をかけてくれる。このまちは、日常的に障害者になじみ、それを受け入れる下地が長い年月で開拓されてきている。湯沢さんは、このような障害者施設は、郊外部より便利な都心がいい、という。郊外にあれば、わざわざ足を運ぶことになるが、都心にあれば、気軽に立ち寄ることができるから、という理由である。

都市の中の障害者施設、とくにこのような通所施設の立地については、福祉局として明確な方針があるわけではないが、施設の運営のあり方如何によっては、地域のコミュニティのつながりを強め、より豊かな経験を住民に与える場となりうる。大規模住宅地の「中心市街地」の施設として存在し、コミュニティの合意形成の土壌づくりに大いに役立つ資源として位置づけることが可能なのである。

本稿は、朋施設長の日浦美智江さん、ボランティアの湯沢淳子さんへのインタビューをもとに作成しました。

〈参考図書〉「朋はみんなの青春ステージ」ぶどう社刊